

〔東京農業イノベーションプロジェクト（受託研究）〕

養液栽培における抑制キュウリの台木品種の比較

木下沙也佳・野口 貴・沼尻勝人・海保富士男
(園芸技術科)

【要 約】抑制作型の養液栽培で、キュウリ「超・彩輝」を穂木として台木8品種を比較すると、収量は「ときわパワーZ2」で高くなる。

【目 的】

東京式養液栽培システムを利用したキュウリ栽培では、半促成と抑制（越冬）栽培を基本とした作型構成をとっている。これまでに、半促成栽培に適した台木品種を明らかにしたが、抑制栽培においては検討してこなかった。そこで、ここでは7月まき抑制作型に適した台木品種を選定し、キュウリの生産性向上のための資料とする。

【方 法】

2016年7月5日に「オールスター一輝，スターク，ときわパワーZ，ときわパワーZ2，ビッグアイ，ゆうゆう一輝」，7月14日に「ときわGT-II，ぞっこん」を播種し，適期に達した「超・彩輝」と断根挿し接ぎを行い，8月1日に東京式養液栽培システムのベッドに40cm間隔で定植した。活着後，各株を交互に左右に振り分けて誘引し，株間80cm×2条の栽植（138株/a）とした。主枝は15節で摘心し，4本の側枝（子づる）を誘引枝としてつる下ろし整枝を行った。誘引枝以外の側枝は1節で摘心し，2次側枝（孫づる）は除去した。養液は「タンクミックスA&B」原液の2%希釈液を基本とし，栽培ベッドの貯留液の水位が常に一定になるよう自動給液した。区制は1区3株の2反復とし，11月下旬まで収穫調査した。

【成果の概要】

1. 旬別収穫果数をみると，どの品種も変動が大きく，9月上旬で「スターク，ビッグアイ」で，11月中旬で「ときわパワーZ2，ぞっこん」で特に多かった（図1）。各品種で9月中旬下旬に収穫果数が少ないのは，日照時間が短かったためである（データ省略）。
2. 旬別収量は，全果，可販果ともに「ときわパワーZ2」で多く，次に「スターク」であった（図2）。また，可販果収量の割合は「TPZ」以外はいずれも高かったが，特に「ときわパワーZ2，ビッグアイ，ゆうゆう一輝」で高かった。
3. 株あたりの下物果数は「ときわGT-II」がもっとも少なかった（図3）。内訳では，下物の大部分は曲がり果であり，他には「ゆうゆう一輝」などでの短形果であった。
4. 節間長は「ビッグアイ」が約10cm，その他の品種は約11cmでやや長かった（図4）。節数は「ときわパワーZ2」がもっとも多く，「ときわパワーZ」がもっとも少なかった。莖径には大差はなかった。
5. まとめ：抑制作型の養液栽培でキュウリ台木8品種を比較したところ，収量は「ときわパワーZ2」でもっとも高くなったことから，本作型における有望品種である。

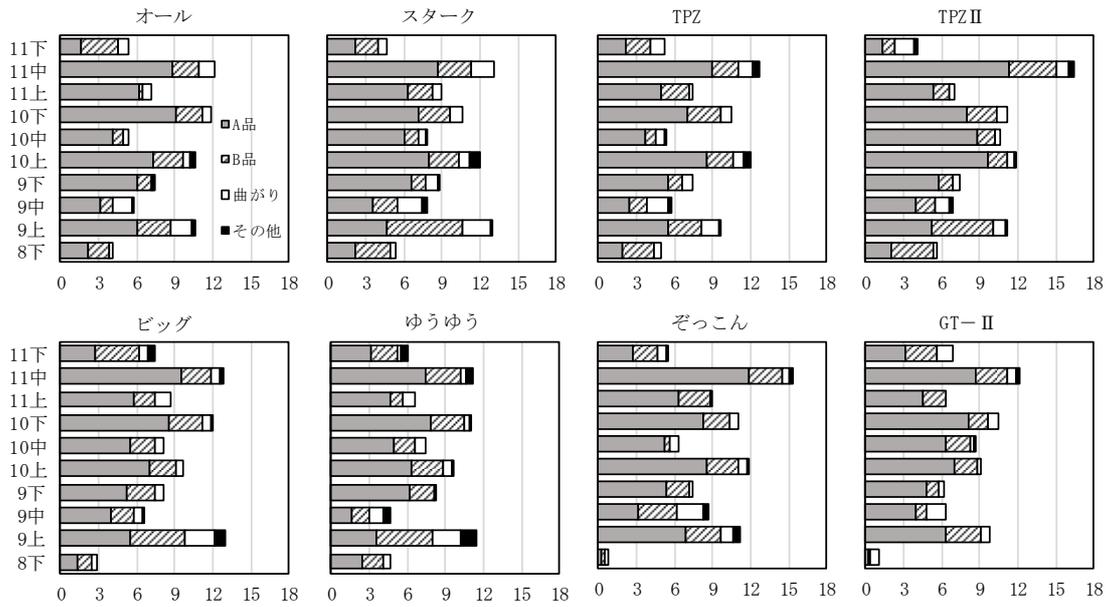


図1 台木品種別旬別果数(本/株)
 品種名の凡例：オール(オールスター輝), TPZ(ときわパワーZ), TPZ II(ときわパワーZ2),
 ビッグ(ビッグアイ), ゆうゆう(ゆうゆう輝), GT II(ときわGT-II)

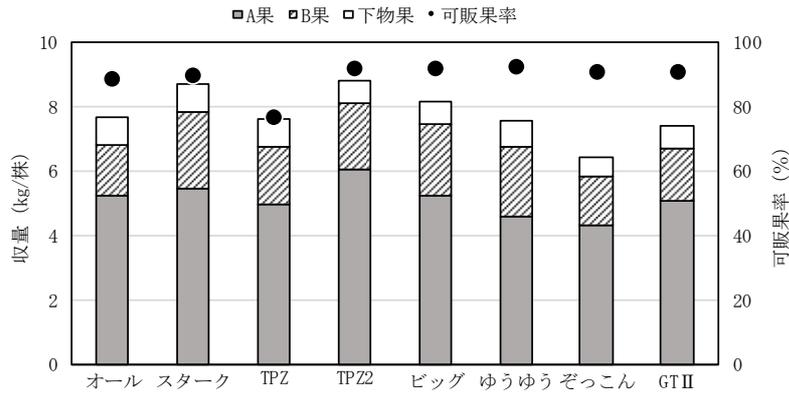


図2 キュウリ台木品種別収量 品種名の凡例は図1参照

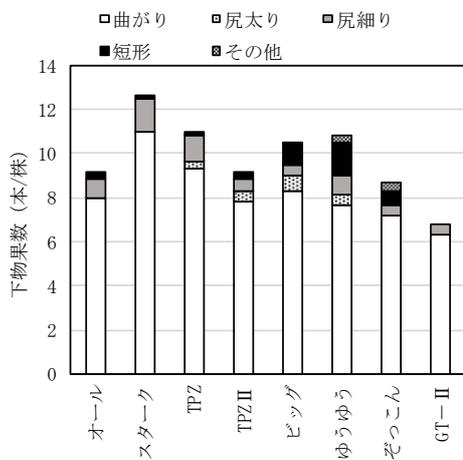


図3 キュウリ8品種の下物果数
 品種名の凡例は図2参照

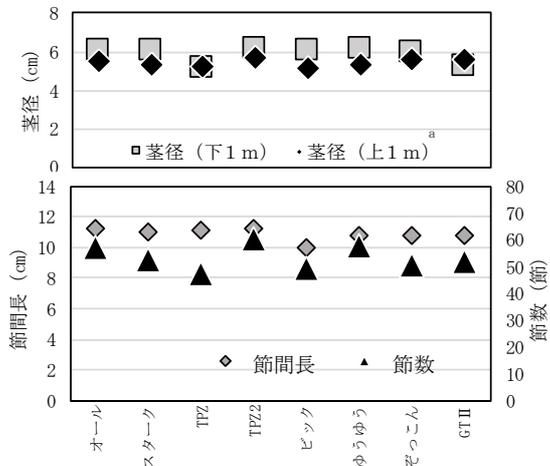


図4 キュウリ8品種の生育
 品種名の凡例は図2参照

a) 茎径の下1mは主枝から1m, 上1mは先端から1mの位置を示す